

「家がいいね」 第184号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2019.9.2

生き物として、「この世へ

トンボも身近に飛ぶ季節。生まれるとは、どういうことか考えてみましょうか。生まれてきたものにとって

は、受身形かもしれない。確かに生命は受け継いできたものです。細胞に悠久の時間を込め、送り届けられたのです。どの生き物に

も、次世代を残さずとも、「この時を生きよ」と与えられたものです。人間には、血の繋がらない相手に深く影響を与える力さえあります。一人で生きるとしても、誰彼と関わらずにはおれないのなら、命を愛おしみつつ、全うしましょうよ。



あの遠藤さんに会いました

72歳の遠藤さんは脳性マヒ、東京に住み、大卒後に養護教員になりましたが、寝たきりになって35年が過ぎました。一人で生きる自分の居場所「えんとこ」へ多くの支援者を引き寄せています。遠藤の所、縁のある所が呼び名の由来です。1999年、この様子が映画「えんとこ」になりました。介護を24時間、交代で引き継ぐことが日常的に重大と分かる内容です。多くの若者が応じ、そして彼の元を卒業してゆきました。障害と共に生きる姿を若者自らの指針ともしていました。2016年、障害者は生きていくだけで不幸だと殺害された「やまゆり園」の事件がありました。世情の反応に痛ましく思う遠藤さんは、短歌で「自らのいのち大切に生きて生きる絆を求め我は生き来(こ)し」と詠んでいます。前作から20年経ち、このような彼の日常が「えんとこの歌」になりました。

8月24日は遠路進富座に来てくれました。支援者も様々な彫りの深い社会人たちでした。



診察で交わす言葉4「どうしたら前向きに？」

「先の推定が不確実なのは患者も医師も同じ条件です。一緒に考えていく関係が、人生の最終章までつなげることが大切です」と前回言いました。入り口は「この先どうなる？」の言葉から始まる

と思うのですが、「前向きに」の言葉がかぶさってきます。ポジティブな態度、前向きな姿勢が世間では当然の価値観であるのが影響するのでしょうか。確かに、問題を見つけて出し、分析・整理して、対処や解決法を論理的に導き出す能力は、会社では求められます。ハウツーやマニュアルも、想定範囲内では、多種提示されることになるわけです。

しかし不測の事態で解決不能の場合は、思考停止やパニックに陥るでしょう。ここで壊れることなく、自分なりの道を探るのが生活の英知です。答えの出ない事態に耐える力、つまり負に耐える力が必要なのです。

過去に、先祖が困難に立ち向かった態度がヒントになるでしょう。師は近くに居ます。



9月の津市での講演会のお知らせ

9月16日(月・祝) 14時〜 有料500円

ひとも生き物として普通に生きる

生命詩の研究者(中村桂子)と在宅ホスピス医(内藤いづみ)が語り合う

三重県総合文化センター
フレンテみえ多目的ホール



みえ生と死を
考える市民の会



自宅での人生を
最期まで支援します

〒516-0805
三重県伊勢市御園町高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105

メール homecare@kr.tcp-ip.or.jp
ホームページ <http://isezaitaku.com>

↑バックナンバーはここで閲覧可